

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

発表演題名：Differences in Response during Activities in Patients with Dementia-Analysis of
Comparison among Three Groups Classified by Severity-

学 会 名：18th WFOT congress

会 期：2022 年 8 月 27～31 日(現地時間)

開 催 地：フランス パリ

氏 名：米山 智彦

所 属 士 会：京都府

1. 発表演題の概要

＜はじめに＞認知症患者は症状が進行するほど、活動に対しての主体性や対人交流が低下すると言われているが、それを定量的し、視覚的に示された知見は乏しい。

＜目的＞認知症重症度により活動時に観察される内容が異なることを、観察視点を数値化できる評価法である Assessment of quality of activities(以下、A-QOA)を用いて明らかにすることである。

＜方法＞認知症および認知障害を程した患者 676 例を対象とした、Functional Assessment Staging(FAST)を用いて、重症度を軽度、中等度、重度に分類した。活動中の様子を A-QOA を用いて評価した。A-QOA はクライアント(以下、CL)が活動をしている場面において作業従事の質の評価をするための観察に基づいた評価法である。CL が活動に従事している場面を、21 の観察項目で採点し、作業従事の質が Probit 値として算出される。

重症度別の A-QOA のスコアの傾向を分析し、3 群間比較を行った。

＜結果＞重症度による 3 群間比較では 20/21 項目で有意差を認めた。A-QOA のスコアは各重症度とも同傾向を示した。各集団の平均スコアは重症度が重くなるほど低値を示した。

＜結論＞今回の結果より、定量化されたデータにおいても、重症度の違いにより、活動時の反応が異なることが示唆された。加えて、活動時に認める反応は、認知症の進行に伴い全般的に乏しくなる傾向があることも示唆された。

2. 学会参加と発表の印象

今回の経験が私にとっての初めての海外学会参加でした。2 大会前に横浜で開催された WFOT congress に参加した経験はありましたが、その際は発表はせずに参加をただけでした。その時まで英語に触れる機会が少なく、英語に苦手意識があった私は英語のセッションや他国の作業療法士(以下、OT)の方と触れ合うことは避けていました。そのため、これまで海外旅行に行ったことのない私にとっては日本人以外のコミュニティの中で生活す

ることも初めての経験でした。渡仏前は全ての面では不安な気持ちしかありませんでした。案の定、英語の語学力の乏しい私は参加者や現地の方との言語を通じての交流は難しかったと感じましたが、それでも今回の学会参加はそれを補ってなお余りあるくらいの貴重な機会となったと感じています。

ポスター発表に関しては、神戸学院大学大学院修士課程時代にお世話になった指導教員の小川真寛先生と、田代大祐先生の御二方にポスター作成の段階から現地での発表までサポートして頂き、なんとか無事発表に至ることができました。今回は e-ポスターが中心の発表形式でありましたが、希望者は現地でポスター掲示も可能でしたので、現地掲示を行いました。その中で予想より多くの方に足を止めて頂き、今回の研究について好意的な意見を頂いたり、私達が参加している研究グループが開発している *Assessment of quality of activities*(以下, A-QOA)と類似した評価法を教えて頂いたりすることができました。自分達の研究が海を越えても通じることに喜びを感じました。またそれに加えて、昨今の世界的な COVID-19 のパンデミック禍で遠のいていた対面学会で、様々な OT の方と直接 *face to face* で議論を交わせたことに関しても、ただ純粋に喜びを感じれたとともに、対面学会の醍醐味を久々に実感しました。2 年後の北海道で開催されるアジア太平洋作業療法学会までには語学力を向上させ、今回味わえなかった他国の OT の方々とのディスカッションをできるように自己研鑽を続けていこうと思います。

学会全体を通じての感想は、セッションの分類も日本の様に疾患ベースでの分類はされておらず、*Aging* や *Infant* 等のライフステージ別や *Occupational Justice* や *Health promotion* 等の包括的な概念による分類が多く、そこにどちらかというと個人に向けての視点が強い日本における OT よりも世界はよりマクロの視点で作業療法を捉えていると感じました。また、参加した災害に関するシンポジウムにおいては、世界各国の OT の方が自国での経験や取り組みを紹介してくださいました。その中で現在戦下のウクライナからこられていた *Oly Mungusheva* さんの話がとても印象的でした。戦時下のウクライナでは母親としての子を持つ OT の方も多く、子供を守らなければいけない母親としての役割と OT としての役割の中で葛藤しながらシェルターで作業療法を実施しなければいけない時もあるとの報告がありました。彼女のプロフェッショナリズムに感心するとともに、これまで、病院や施設を中心に実践を重ねてきた私に作業療法の対象範囲は広くことを再認識させてくれました。ウクライナの情勢は、決して他人事ではなく、我が国でも近い将来起こりうる可能性もあるため、これからは改めて私たち OT の対象は個人だけでなく集団や社会にも及ぶことを胸に止めていこうと思いました。また同時に一刻も早くウクライナ情勢が安定化し、彼女達に母親としての平穏な日常の生活が戻ることを祈る次第です。

個人的な経験としても今回の渡仏は貴重な気づきの機会となりました。フランスは日本に比べてマスクの使用率が圧倒的に少なく、現在、私達日本人が切望しているマスク無しの日常に一足早く戻っていました。お昼や夕方は店のテラス席で友人や家族と食事をしながら談笑する。パリの街中を闊歩したり、イベントに参加する。そんな今まで私たちにも当た

り前であった毎日がフランスの街並みにはありふれていました。そんな光景を目の当たりにし、現在私達は COVID-19 のパンデミックにより作業剥奪の状態に陥っており、今まで当たり前に行えていた、家族や友人との生活や学会での様々な OT の方々との交流は私にとっては「意味のある作業」であったのだと痛感しました。また、これまで仕事中心に生活し、今回は持病の治療と並行しての参加で、自分の生活は二の次にしてきた気がします。今後は改めて、OT としてだけではなく、1 人の人間としての自分の人生を考えないといけないなと思いました。今回の学会参加は、自分自身、家族や友人にも作業療法をして行かなければいけない、そんなことを気づかせてくれた大変貴重な機会となりました。このような機会を与えて下さった、日本作業療法士協会の方々に深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

3. 文献

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）